

今朝も皆さまと共に主を礼拝できますこと感謝します。今朝もエペソ人への手紙をともに読んでまいりましょう。先主日まで、奴隷と主人の関係について教えるみことばをともに味わいました。

奴隷に対してはイエスさまに従うように主人に従うように、そして主人に対しても奴隷に同じようにするようにと教えられていました。奴隷も主人も、ともにキリストの僕として目の前にいる人に精一杯仕えること。どんな人にもイエスさまのゆえに誠実に関わることを教えられました。そして主は人を差別なさない。私たちを差別せず愛し赦し受け入れてくださるイエスさまを見上げて、どんな人にも公平平等に関わっていく。貧しさや弱さを抱えた方々のために積極的に仕えていく。そのようなことを教えられました。

今日もその続きを読んでいきます。いよいよエペソ人への手紙も終わりに差し掛かってきました。確認したところ、このエペソ人への手紙を説教で読み始めたのは2023年の6月でした。2年以上かけて、この手紙を読んでいきます。パウロはこれまでこの手紙を通して神さまが私たちに与えてくださった恵みによる救い、教会という恵みの器、さらには私たちが互いに愛し合い敬い合い仕え合って生きていくことを教えてきていました。

強められなさい

そして今日の箇所でパウロは「終わりに」と語ります。愛するエペソの教会、そこにある一人ひとりを思いながら、パウロは最後の言葉として、今日の箇所から始まる部分を記しています。

終わりに言います。主において、その大能の力によって強められなさい。

これまで手紙を通して伝えてきたことの最後に、締めくくりとしてパウロが語りたかったこと。それは、「主において、その大能の力によって強められなさい」ということでした。強められなさいとパウロは言います。パウロがエペソの人々に願ったことは神さまによって強められることであつた。イエスさまによって強くされることをパウロはエペソの人々に願った。強くあるように、強められることを祈り求めるように。そうパウロは最後に勧めた、ということです。

パウロが強められなさいと人々に語る。それは、イエスさまを信じる私たちの歩み、教会の歩みには戦いがあるから。イエスさまによって強められなければ私たちは立ち行くことができない。それをパウロはよく知っていたからだと思います。

事実パウロは信仰の戦いを戦った人でした。最初は教会を迫害する者であつたパウロですが、イエスさまと出会い180度人生を変えられ、彼はイエスさまのため教会のために仕える者となりました。そして彼は異邦人の使徒として、外国の地でイエスさまを伝える者とされます。そこで彼はユダヤ人からの迫害や異邦人からの迫害、反対者からの攻撃や時には教会の中からの攻撃をたくさん受けることとなっていきました。パウロ自身がこう証言しています。コリント人への手紙第二11章23-30節。

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。

ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。

ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまづいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか。もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。

パウロの宣教の働き。そこには多くの攻撃や苦難があり、戦いがあった。その中でパウロ自身、弱さを覚えることもあったということです。誰かが弱くなっている時に、私は弱くならないでしょうか。誰かがつまづいていて、私は心が激しく傷まないでしょうか。日々起こる色々な出来事に心揺さぶられ痛み、自分の弱さという現実を目の当たりにする。そんなパウロの真実な言葉がここには記されています。

同じように私たちがこの地でイエスさまを信じて行こうとする時、多くの戦いや誘惑があります。次主日に見ますが悪魔との戦いもある。決して綺麗事や、平和的なことだけではない現実が私たちの目の前には広がっているわけで

す。私たち自身、弱さや欠けを持ち、限界を持った小さな罪人でもある。そのような現実に向かい、悪との戦いに勝利するために、強められること。イエスさまによって強くされることをパウロはエペソの人々に語りました。この「強さ」とは決して人に対して強く当たるとか、相手を攻撃して黙らせるとか、人より優位に立ち他者を蹴落とすという意味での「強さ」ではありません。神さまの御心に従う強さ。世の考え方や、悪魔の策略に負けないための強さが私たちには必要だということです。神さまにある、イエスさまにある本当の強さを私たちは身につける者でありたい。そのためにますます御霊の助けと導きを仰ぎ求め祈る者でありたいと思うのです。

「主にあって」

そしてここで大切なことは「主にあって」強められなさいと言われていることです。

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

パウロは強くなりなさい、ではなく主にあって強められなさいと言います。「主にあって」と訳されている言葉は、「主の中で」とか「主の中にあって」という意味の言葉です。私たちは主イエスさまによって強められるとともに、このお方の中で、このお方との交わりのうちで強められ支えられるのだということです。イエスさまの内にこそ、私たちの力の源がある。強さの秘訣がある。そう聖書は教えています。聖書が「強められなさい」と教える時、それは何か個人的な訓練や鍛錬によって強められなさいと言われているわけではありません。滝に打たれて精神を鍛えるとか、断食をして悟りを開くとか、そういうことがここで求められているのではない。イエスさまの内にあって強められること。イエスさまとの交わりの中で私たちは強められ支えられる。さらにこの命令は複数形で語られています。あなたがたは強められなさい。個人的な強さだけではなく、教會的な強さ、共同体としての強さがここに語られている。悪魔に打ち勝つための力、誘惑に負けないための強さを私たちはどこで得ていくか。それはイエスさまとの交わり、教會の交わりを通してだ、ということです。パウロは私たち教會をこのような言葉で表現していました。同じエペソ人への手紙の1章23節。

教會はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。

イエスさまのからだである教會として、強められ励まされ、主にある神の家族とともにこの世の悪や誘惑と戦っていく。それを聖書はパウロは私たちに教えているのだということです。さらにイエスさまはこう言われました。ヨハネの福音書15章5節。

わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。

イエスさまはわたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのですと言われます。イエスさまのうちに留まり、イエスさまの体である教會にとどまる時、私たちは力を得ることができる。イエスさまにある枝とされた教會の交わりを通して、私たちは互いに支え合い励まし合って、ともに進んでいくことができる。この地の信仰の戦いを戦うことができる。イエスさまにある「強さ」教會の交わりを通して与えられる「強さ」を聖書は私たちに教えているのです。

私自身、日々の教會生活の中で主にあって強められること、教會の交わりの中で強められることの大切さとそこにある恵みを実感しています。毎主日こうしてともにささげる礼拝を通して、皆さんとの交わりを通して、また祈り会や聖書の学び、様々な機会を通して神さまから力をいただく。私がこうして牧師として立つことができるのも、皆さんというキリストの枝である一人ひとりを通していただく強さ、力のおかげだなと思っています。私のために祈ってくれている人がいること。皆さんがかけてくださる言葉や態度、眼差しによって湧いてくる力があります。そうやって、イエスさまの愛の中、教會の交わりの中で私たちは強められ励まされていきたい。たとえ弱さを覚えることがあっても、互いのために祈り合い支え合って、ともにこの地に神さまの御心を行う群れとして歩んでいきたい。そのように願っています。

大能の力

そしてパウロは、主にあって強められなさいと語るとともに、「その大能の力によって」強められなさいと語っています。

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

大能の力というのは、神さまの何でもおできになる力、という意味です。何でもできる力が、神さまのうちにイエスさまのうちにあります。強められなさいと言われる時、私たちは自分で自分を諦めてしまうこと。自分は弱いと決めつけ投げ出してしまふ、そんなことがあるのではないかと思います。強められなさいと言われても、どうせ私は弱い。私には無理だと考えてしまふ。しかしパウロはそして聖書は、大能の力によって強められなさいと、強められ

ることができるのです。弱く小さな私たちこの私も神さまの力によって立ち上がり、罪や悪と戦うことができます。何でもできるイエスさまの力によって私たちは強められ、信仰の歩みを進んでいくことができます。そうパウロは教えているのです。パウロはこの「大能の力」という言葉をエペソ人への手紙の1章15-21節で語っていました。

こういうわけで私も、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛を聞いているので、祈るときには、あなたがたのことを思い、絶えず感謝しています。

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、

また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。

この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。

パウロの語る「大能の力」それはすなわち、神さまの救いの力です。イエス・キリストを死者の中からよみがえらせた力、イエスさまによって救いを成し遂げた神さまの御力。その力によって強められること。どんなことでもおできになる神さまの力によって私たちは強められ支えられ、信仰の戦いを進んでいくことができるのだということ。信仰の歩みを通してイエスさまの力と励ましをいただき、この大能の力がどれほどに素晴らしく偉大なものであるかを知っていく。そのような幸いな生涯に招かれていることを覚えて、感謝と喜びのうちに私たちは進む者でありたいと思います。

先週私はちょうど、イエスさまにあって強められる経験をしました。正確には強められるようにと祈っていただく経験でした。近所に八千代オンヌリキリスト教会という教会がありますが、そこに韓国からの宣教チームがいらっしゃっていて、先日この八千代聖書教会を訪問してくださいました。オンヌリ教会の先生とともに20名ほどの若い方々がいらっしゃってお交わりをし、最後は私を囲んで皆さんでこの教会のため、私のために祈ってくださいました。それはとても不思議な、そして心強さ、力強さを感じる経験でした。祈ってもらうことを通して、偉大な神さま、全能の主が私とともにこの教会とともにいてくださる。主の大能の力によって私たちは強められ進んでいくことができる。そんな恵みを改めて覚えた時でした。私たちのためこの教会のため祈ってくれている方々がいます。全能の主なるイエスさまが、今日も大能の力を持って、私たち一人ひとりに、この八千代聖書教会に臨んでいてくださる。そのことに信頼し、このお方にあって強められることをますます祈り求める私たちでありましょう。救い主イエスさまの恵みに心から感謝をし、互いに支え合うことのできる教会の交わりに感謝をして、私たちは今日もそれぞれの地へと遣わされてまいりたいと思います。

祈ります。「私たちの救い主、イエス・キリストの父なる神さま。御言葉をありがとうございます。

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

私たちが信仰を持ってこの地を歩む時、そこには多くの戦いがあり困難があります。何より自分自身の弱さや罪の現実打ちひしがれる。そんな私たちです。しかしどんなこともおできになる救い主イエスさまが今日も私たちとともにおられること。イエスさまのからだである教会に連なる幸いを与えられていることに感謝し、イエスさまによって強められて信仰の歩みを進むことができますよう、私たちを励まし導いてください。私たち八千代聖書教会の交わりがますます互いに祈り合い支え合い、ともにあなたのみこころをなすものとなりますように。御言葉に感謝して、主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。」